

## 石川・本町一丁目遺跡

ほんまち

ているが、本報告はその第一次調査に関するものである。

遺構は土坑と溝であり、木簡は全て土坑から出土している。土坑は群をなしており、一つの大きさは概ね径1~2m前後、深さも同様である。これらは、壁土に適した地山の粘質土を採掘した穴を、ゴミ穴として転用したものと考えている。この付近の土の堆積は、深さ1m前後で粘土質から壁土に適さない砂質の土に変わる。壁土を採掘した後、上部の壁土に適さない土を埋め戻し、その後ゴミを投棄しているため、下層は遺物が希薄であり、上層に集中している。

(1)~(3)は径約150cm深さ約145cmのSK-17、(4)~(7)は径・深さともに約150cmのSK-111、(8)(9)は径約130cm深さ約110cmのSK-15、(10)は径約160cm深さ約175cmのSK-14から出土している。土坑は径約180cm深さ約175cmのSK-14から出土している。土坑は調査区の北西部と南西部に集中しており、その中間は遺構の密度が極めて薄い。SK-27・113・08・24は調査区北西部、SK-15は調査区南西部に位置している。

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| 1 所在地           | 石川県金沢市本町一丁目          |
| 2 調査期間          | 第一次調査 一九九〇年(平2)七月~一月 |
| 3 発掘機関          | 金沢市教育委員会             |
| 4 調査担当者         | 楠 正勝・増山 仁            |
| 5 遺跡の種類         | 城下町跡                 |
| 6 遺跡の年代         | 江戸時代                 |
| 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |                      |

本町一丁目遺跡は、金沢城下町の町家地に位置している。文化八年(一八一〇)の「金沢町絵図名帳」によると、調査地は木新保町の紺屋棟取・太郎田屋与右衛門の屋敷地周辺にある。遺物の年代も一九世紀前半が中心であるため関連が考えられる。

### 8 木簡の釈文・内容

#### SK-17



(金 沢)

調査は金沢駅武藏北地区  
第一種市街地再開発事業に  
伴うもので、現在までに二  
次にわたる調査が実施され

- |            |             |
|------------|-------------|
| (1) 「申五十六」 | 92×22×4 011 |
| (2) 「申五十八」 | 92×22×3 011 |
| (3) 「申六十」  | 91×22×3 011 |

図版III

図版IV

(4) 「進上」

白砂糖  
宮竹屋  
伊右衛門」

径115×厚7 061

(1)～(3)は富突に使用された木札と考えられる。寺社など富突の興行元が管理していたはずであり、一般町人の「ヨミ」とは考えがたい。

(4)～(10)は曲物の蓋である。(4)(5)は宮竹屋伊右衛門から某所に進上

された白砂糖が入っていたものとわかるが、(6)も同様の可能性が高い。

宮竹屋は金沢の旧家であり、享和二年(一八〇二)以後明治三

年(一八七〇)まで、三代にわたって町年寄を勤めた。家柄町人の宮竹屋が白砂糖を進上する相手は武家か寺社が想定できるが、後者ではないかと考える。(7)～(10)は等願寺・慶□寺・光専寺から某所へ贈られた浜納豆の入っていたものである。等願寺・光専寺は真宗大

谷派の寺院である。慶□寺は不明。浜納豆は広く寺院で製造されて

いたようだ、贈答品として使用されていた。また、特に大切な相手

に対しての贈答品であった事例も確認されている。本遺跡付近では

真宗大谷派の寺院から進物がなされるような有力な寺院としては東

末寺(真宗大谷派金沢別院)があり、そこから廃棄されたものである

可能性も考えられる。(11)の「八掛」は易の八卦のことであろうか。

(11) 「(縦) 八掛車」 (214)×(68)×3 065

(214)×(68)×3 065

(5) 「進上」

白砂糖  
宮竹屋  
伊右衛門」

径115×厚5 061

(1)～(3)は富突に使用された木札と考えられる。寺社など富突の興行元が管理していたはずであり、一般町人の「ヨミ」とは考えがたい。

(4)～(10)は曲物の蓋である。(4)(5)は宮竹屋伊右衛門から某所に進上

された白砂糖が入っていたものとわかるが、(6)も同様の可能性が高い。

宮竹屋は金沢の旧家であり、享和二年(一八〇二)以後明治三

年(一八七〇)まで、三代にわたって町年寄を勤めた。家柄町人の宮竹屋が白砂糖を進上する相手は武家か寺社が想定できるが、後者ではないかと考える。(7)～(10)は等願寺・慶□寺・光専寺から某所へ贈られた浜納豆の入っていたものである。等願寺・光専寺は真宗大

谷派の寺院である。慶□寺は不明。浜納豆は広く寺院で製造されて

いたようだ、贈答品として使用されていた。また、特に大切な相手

に対する贈答品であった事例も確認されている。本遺跡付近では

真宗大谷派の寺院から進物がなされるような有力な寺院としては東

末寺(真宗大谷派金沢別院)があり、そこから廃棄されたものである

可能性も考えられる。(11)の「八掛」は易の八卦のことであろうか。

(6) 「進上」  
□  
〔白カ〕

白砂糖  
宮竹屋  
伊右衛門」

径114(復原)×厚4 061  
径115×厚5 061

径134×厚4 061

(1)～(3)は富突に使用された木札と考えられる。寺社など富突の興行元が管理していたはずであり、一般町人の「ヨミ」とは考えがたい。

(4)～(10)は曲物の蓋である。(4)(5)は宮竹屋伊右衛門から某所に進上

された白砂糖が入っていたものとわかるが、(6)も同様の可能性が高い。

宮竹屋は金沢の旧家であり、享和二年(一八〇二)以後明治三

年(一八七〇)まで、三代にわたって町年寄を勤めた。家柄町人の宮竹屋が白砂糖を進上する相手は武家か寺社が想定できるが、後者ではないかと考える。(7)～(10)は等願寺・慶□寺・光専寺から某所へ贈られた浜納豆の入っていたものである。等願寺・光専寺は真宗大

谷派の寺院である。慶□寺は不明。浜納豆は広く寺院で製造されて

いたようだ、贈答品として使用されていた。また、特に大切な相手

に対する贈答品であった事例も確認されている。本遺跡付近では

真宗大谷派の寺院から進物がなされるような有力な寺院としては東

末寺(真宗大谷派金沢別院)があり、そこから廃棄されたものである

可能性も考えられる。(11)の「八掛」は易の八卦のことであろうか。

S K I V

(7) 「進上」  
□  
〔浜納豆  
等願寺〕

白砂糖  
宮竹屋  
伊右衛門」

径132×厚5 061

(1)～(3)は富突に使用された木札と考えられる。寺社など富突の興行元が管理していたはずであり、一般町人の「ヨミ」とは考えがたい。

(4)～(10)は曲物の蓋である。(4)(5)は宮竹屋伊右衛門から某所に進上

された白砂糖が入っていたものとわかるが、(6)も同様の可能性が高い。

宮竹屋は金沢の旧家であり、享和二年(一八〇二)以後明治三

年(一八七〇)まで、三代にわたって町年寄を勤めた。家柄町人の宮竹屋が白砂糖を進上する相手は武家か寺社が想定できるが、後者ではないかと考える。(7)～(10)は等願寺・慶□寺・光専寺から某所へ贈られた浜納豆の入っていたものである。等願寺・光専寺は真宗大

谷派の寺院である。慶□寺は不明。浜納豆は広く寺院で製造されて

いたようだ、贈答品として使用されていた。また、特に大切な相手

に対する贈答品であった事例も確認されている。本遺跡付近では

真宗大谷派の寺院から進物がなされるような有力な寺院としては東

末寺(真宗大谷派金沢別院)があり、そこから廃棄されたものである

可能性も考えられる。(11)の「八掛」は易の八卦のことであろうか。

(8) 「進上」  
□  
〔浜納豆  
慶□寺〕

白砂糖  
宮竹屋  
伊右衛門」

径134×厚5 061

(1)～(3)は富突に使用された木札と考えられる。寺社など富突の興行元が管理していたはずであり、一般町人の「ヨミ」とは考えがたい。

(4)～(10)は曲物の蓋である。(4)(5)は宮竹屋伊右衛門から某所に進上

された白砂糖が入っていたものとわかるが、(6)も同様の可能性が高い。

宮竹屋は金沢の旧家であり、享和二年(一八〇二)以後明治三

年(一八七〇)まで、三代にわたって町年寄を勤めた。家柄町人の宮竹屋が白砂糖を進上する相手は武家か寺社が想定できるが、後者ではないかと考える。(7)～(10)は等願寺・慶□寺・光専寺から某所へ贈られた浜納豆の入っていたものである。等願寺・光専寺は真宗大

谷派の寺院である。慶□寺は不明。浜納豆は広く寺院で製造されて

いたようだ、贈答品として使用されていた。また、特に大切な相手

に対する贈答品であった事例も確認されている。本遺跡付近では

真宗大谷派の寺院から進物がなされるような有力な寺院としては東

末寺(真宗大谷派金沢別院)があり、そこから廃棄されたものである

可能性も考えられる。(11)の「八掛」は易の八卦のことであろうか。

(9) 「進上」  
□  
〔浜納豆  
荒町  
光専寺〕

白砂糖  
宮竹屋  
伊右衛門」

径132×厚5 061

(1)～(3)は富突に使用された木札と考えられる。寺社など富突の興行元が管理していたはずであり、一般町人の「ヨミ」とは考えがたい。

(4)～(10)は曲物の蓋である。(4)(5)は宮竹屋伊右衛門から某所に進上

された白砂糖が入っていたものとわかるが、(6)も同様の可能性が高い。

宮竹屋は金沢の旧家であり、享和二年(一八〇二)以後明治三

年(一八七〇)まで、三代にわたって町年寄を勤めた。家柄町人の宮竹屋が白砂糖を進上する相手は武家か寺社が想定できるが、後者ではないかと考える。(7)～(10)は等願寺・慶□寺・光専寺から某所へ贈られた浜納豆の入っていたものである。等願寺・光専寺は真宗大

谷派の寺院である。慶□寺は不明。浜納豆は広く寺院で製造されて

いたようだ、贈答品として使用されていた。また、特に大切な相手

に対する贈答品であった事例も確認されている。本遺跡付近では

真宗大谷派の寺院から進物がなされるような有力な寺院としては東

末寺(真宗大谷派金沢別院)があり、そこから廃棄されたものである

可能性も考えられる。(11)の「八掛」は易の八卦のことであろうか。

(10) SKI V  
泉浜納 X

2000年出土の木簡

(向井裕知)



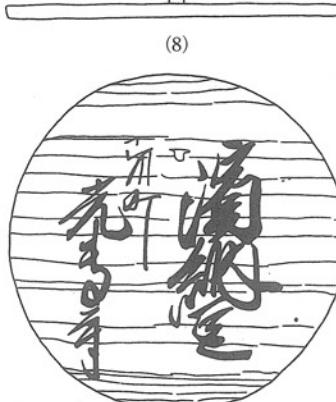
(3)

(2)

(1)



(4)

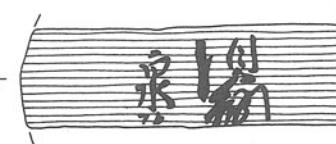


(5)



(11)

(9)



(6)



(10)